

# 数学と心に関するウィトゲンシュタインの思考の連続性

入江俊夫 (Toshio Irie)

文教大学

『哲学探究』の構想が 1944 年に変更され、後半に位置するはずであった数学の哲学の部分が（おそらくはひとまず）外されて、「規則遵守論」の次に「私的言語論」が続く「中間版構想」へと舵が切られたことはよく知られている。しかしながら、その後、心に関して書き残されたものは数学の哲学と無関係かという点、必ずしもそうとは言えない。例えば、最初の遺稿管理者の一人であるラッシュ・リースが「アスペクト論」を動機付けたものとして「数学での『洞察』の役割や証明の発見について<sup>1)</sup>」の問題を示唆している。両者の関連性が明らかになることは、数学の哲学にとっても、心に関する所見の狙いを掴むためにも意義のあることであろう。

本提題では、ウィトゲンシュタインの一般的な概念観・言語観に着眼することにより、彼の数学の哲学と心の哲学との関連性を指摘し、連続的な発展の相に光を当てる。

まず、『同じ』を見る」と呼びうる主題を扱う。これは上でリースが示唆していた問題であると考えられ、次の 2 つの所見において明白に見られる。一つは、1939 年に行われた数学の哲学についての講義の第 6 講義からの引用であり、ここでウィトゲンシュタインは“same”, “similar”, “analogous” という語がそれぞれ 2 つの異なった意味で使用されることに我々の注意を向けている。(彼はこれら 3 つの語のうち 1 つについて言えることは他の 2 つについても言えると補足している。本稿以下の地の文では「同じ」(“same”) で代表させて述べることとする。)

(1) 我々は特定のパターンを、例えば、壁紙の上に、「それはしかじかと類比的(analogous) だ」と言いつつ書き付ける。

(2) 「これが類比的なケースなのであって、それではない。」—これは全く異なる。

というのも、この場合、我々は目の前に 2 つのものを持っているからだ；だが、前者の場合は、我々の前には 1 つのものしかなく、我々は「類比的」という語によってさらにもう一つのもの(another thing) を記述した(彼にさらにもう一つやれと命令した)のだ。

(LFM, p. 59. 邦訳, 102 項。「というのも」以下の改行は引用者による)

もう一つは、『哲学探究』第 2 部 X I の「アスペクト論」の出だしの部分の引用である。

「見える」という語の 2 つの使用 (Verwendungen).

(1) その 1 つ: 「君にはそこに何が見えるのか?」—「私にはこれが見える」(それから、ある記述やスケッチ、模写が続く。)

(2) もう 1 つの使用: 「私にはこの 2 つの顔に類似 (Ähnlichkeit, similarity) が見える」。このことを伝えている相手に、私自身と同様、その 2 つの顔がはっきりと

---

<sup>1</sup> BB, x iv. 邦訳 16-7 項.

見えていても構わない。

(PI, p. 203. 邦訳, 383 項. 番号付けと (2) からの改行は引用者による)

いずれの場合においても, (1) では, 何が「同じ」ことであるかは問題とはならず, 単に物事を記述したりすることが問題となっている。それに対して, (2) ではまさに「同じ」であることそれ自体が問題となっている。無論, 数学の哲学でも「アスペクト論」でも, 主題は (2) の方であり, 彼が時折用いた用語でいえば, 内的関係が問題となっているといえよう。

この 2 つの所見の中間に位置するものとして, 本提題では,

こう言えよう。我々は, 規則に従っているときに行っていることを, 常に同じという観点から見る, と。(BGM VII- § 56/NaL MS124, p. 160. 強調は原文。)

という所見を含む, 1944 年 3 月に記された規則遵守論に関する一連の所見 (NaL MS124, pp. 149-165. MS127, pp. 90-119/cf. BGM VII- § § 47-60.) を取り上げる。この所見は数学の哲学に属するもののうちでも最も後の部類に属し, 「重要な思考の動き」と記されていること, “Umgebung” (「周囲, 環境」) という概念の重要性の自覚という点でウィトゲンシュタインの思考の転機を示唆しており, 中間版への構想変更という観点から興味深い。また, “Umgebung” は “Reaktion” (「反応」) などの概念と合わせ, “Praxis” としての規則遵守の深い含蓄を構成し, 構想変更後, 「私的言語論」でも重要な役割を果たすことになる。本提題では, これらの諸概念がどのように上記 (2) のケースの解明に寄与しているのかを考察することを通じて, ウィトゲンシュタインの思考の発展を辿りたい。

#### 略記と文献

[PI]: P. M. S. Hacker, Joachim Schulte (ed.). *Philosophical Investigations* (4<sup>th</sup> ed), Wiley-Blackwell. 2009. (藤本隆志訳。『哲学探究: ウィトゲンシュタイン全集 8』, 大修館. 1976 年. (以下, 全集での邦訳は「全集」と略記し, 出版社を省略する))

[BGM]: *Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik* (3<sup>rd</sup> ed): Band 6. Suhrkamp. 1984. (第 3 版の第 1 刷は同社から 1974 年に出版) (中村秀吉・藤田晋吾訳。『数学の基礎』, 全集 7. 1987 年.) (本稿での参照は第 3 版に基づく。邦訳は第 1 版を底本としている。)

[BB]: *The Blue and Brown Books*. Blackwell. 1994. (大森壮蔵・杖下隆英訳。『青色本・茶色本』, 全集 6 所収. 1975 年.)

[NaL]: *Wittgenstein's Nachlass: The Bergen Electric Edition*. Oxford University Press. 2000. (参照は Von Wright の番号付けに従う)

[LFM]: *Wittgenstein's Lecture on the Foundation of Mathematics Cambridge 1939*, C. Diamond (eds.). The Univ. of Chicago. 1976. (大谷弘・古田徹也訳。『ウィトゲンシュタインの講義 数学の基礎篇』, 講談社学術文庫. 2015 年.)